

白氏文集 三十九 琵琶行 (三)

加藤淳平

潯陽江上の舟の女、絶妙なる琵琶の演奏を披露せる後、自らの來し方を語り出す。

琵琶行 (三)

琵琶行 (三)

間關鶯語花底滑 間關たる鶯語 花底に滑らかに

幽咽泉流水下難 幽咽する泉流 水下に難し

水泉冷澁絃凝絶 水泉冷澁して 絃凝絶す

凝絶不通聲暫歇 凝絶して通ぜざれば 聲暫らく歇む

別有幽愁暗恨生 別に 幽けき愁ひと暗き恨みの 生ずるあり

此時無聲勝有聲 此時の時 聲無きは聲有るに勝る

銀瓶乍破水漿迸 銀瓶乍ち破れて 水漿迸り

鐵騎突出刀槍鳴 鐵騎突出して 刀槍鳴る

曲終收撥當心畫 曲終り 撥を收め 心に當りて畫き

四絃一聲如裂帛 四絃の一聲 裂帛の如し

東船西舫悄無言 東船西舫 悄として言無く

唯見江心秋月白 唯見る 江心に秋月白きを

沈吟放撥插絃中 沈く吟じ 撥を放ちて 絃中に插み

整頓衣裳起斂容 衣裳を整頓して 起ちて容を斂む

自言本是京城女 自から言ふ 本は是れ京城の女

家在蝦蟇陵下住 家は 蝦蟇陵下に在りて住めり

十三學得琵琶成 十三にして 琵琶を學び得て成り

名屬教坊第一部 名は屬す 教坊第一部

曲罷會教善才伏 曲罷めば 會ての善才を伏せしめ

粧成每被秋娘妬 粧成れば 毎に秋娘に妬まる

五陵年少爭纏頭 五陵の年少 争つて纏頭し

一曲紅綃不知數 一曲に紅綃 數を知らず

(大意) (琵琶の音の形容が續く) チチツチチツといふ鶯の囀りが花の底を滑り、幽かにむせび泣く泉の流れが 水の下で妨げられる。水の泉の流れが冷氣によつてとどこほり、絃は凍りつくかのやう。

凍つて流れが通じないから、琵琶の音は暫らく止まる。水の流れとは別に、秘めた憂愁と暗い恨みが生ずるやう。この時音の無いのは音が有るのに勝る。

しかし忽ち銀の瓶が破れ、中の水がほとばしり出るやうに音が炸裂する。さながら鐵騎兵が突出して、刀や槍が鳴るかのやう。一曲が終つた。ばちを收め、胸の前で大きく弧を描くと、絹の布を裂くかのやうに、四つの絃を一齊に拂ふ。東の船も西の船も静まり返り、言葉を發する者は無い。唯河水の中に、秋の月が白く映つてゐるのを見るばかり。

女は低聲で吟じながら、ばちを手から離して琵琶の絃に挟み、着物を整へ、立つて居住まひを正し、

自分から話し出す。「私はもと都の女です。蝦蟇陵の下の家に住み、十三の年から琵琶を學び、教坊の第一部に名を登録致しました。曲を演奏すれば昔の師匠をも感服させ、化粧すれば有名な秋娘姐さんにも妬まれたものです。五陵の若者たちの評判になり、一曲ごとに頭に頂く御祝儀の紅絹は數知れずといふ有様でした。

(平成三十一年一月八日受附)